

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表  
学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名 (姓、名)	トウ ギョク TANG Yu		授与番号 甲 1678 号
学位の種類	博士( 文学 )	授与年月日	2023 年 3 月 31 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項該当者 [学位規則第 4 条第 1 項]		
博士論文の題名	唐代傳奇小説研究——虚構・細部描寫・類話群の關係に基づいて		
審査委員	(主査) 萩原 正樹 (立命館大学文学部教授)	芳村 弘道 (立命館大学文学部特別任用教授)	
	今場 正美 (立命館大学文学部非常勤講師)		
論文内容の要旨	<p><b>【論文の構成】</b> 本論文は、本論全三章と「序」「結論」とで構成される。</p> <p>序 第一章 唐代傳奇小説の中の類話群——細部描写による虚構の一つの体現として 第二章 先行作品の要素の組み合わせによる唐代傳奇小説の創作方法——「靈応伝」を例として 第三章 唐代小説の中の詩の機能 結論</p> <p><b>【論文内容の要旨】</b> 本論文は、唐代の傳奇小説における虚構について検討されたものである。六朝の志怪小説・志人小説を受けて、唐代には傳奇小説が発達するが、両者の決定的な相違は虚構性の有無であった。本論文では、唐代傳奇小説における虚構について、細部描写と類話群という観点から詳細な研究が展開されている。</p> <p>第一章「唐代傳奇小説の中の類話群——細部描写による虚構の一つの体現として」では、傳奇小説における細部描写について論じる。傳奇小説の多くは宴会上で作られており、その際に宴会の雰囲気盛り上げたり、真実味を出すために細部描写が取り入れられた。自分自身の体験ではない話を、自分が実際に経験したかのように細かに語る場所に虚構が生まれることを、「張李二公」の類話群を例として分析を行う。「類話群」とは、原話と、原話から細部の設定を改められて語られた話とを指し、その改定の跡を丹念にたどることで、類話群のストーリーの流転を明らかにしている。またそうした改作が、各作者の創作目的を表していると論じて、各作者たちが意識的に虚構を作ったことを解明している。</p> <p>第二章「先行作品の要素の組み合わせによる唐代傳奇小説の創作方法——「靈応伝」を例として」は、先行作品の要素を組み合わせることによる小説の作り方について、「靈応伝」を例に挙げて検討される。安史の乱以降、人の流動が頻繁になると奇談も全国へ広く伝播した。そのため、一つの先行作品のストーリーだけを借用すると、語られたものが虚構のものだとすぐに聴き手に分かってしまうので、前章で見たような「類話群」という小説の創作方法は通用しなくなる。そこでいくつかの先行作品から要素を組み合わせるといった創作方法が用いられたことを、「靈応伝」を例として論じ、先行作品を借用した要素やその使用状況について具体的に分析することを通して、先行作品の要素の組み合わせという傳奇小説の創作方法を明らかにしている。</p> <p>第三章「唐代小説の中の詩の機能」では、一種の細部描写とみなすことのできる詩に注目し、傳奇小説において細部描写がいかに発展したかについて考察する。唐代傳奇小説中</p>		

<p>論文内容の要旨</p>	<p>に見える詩について、小説のストーリーに介入する程度によって五種類に分類し、そうした詩の機能を「鄭徳璘伝」を例として詳細に論じ、詩が挿入されることで物語に細部描写がもたらされ、また文学性が向上されることを実証している。</p> <p>以上の三章によって、作者による意識的虚構は細部描写から誕生し、晩唐に至るとストーリーも虚構のものになるという段階にまで発展したことを綿密に考察し、唐代伝奇小説における虚構の問題について従来にはない重要な指摘を行っている。</p>
<p>論文審査の結果の要旨</p>	<p><b>【論文の特徴】</b></p> <p>本論文は、細部描写と類話群という点から唐代伝奇小説における虚構の生成と発展について論じたものであり、伝奇小説研究を前進させた点に大きな特徴がある。</p> <p>第一章では類話群について精緻な検討が行われ、原話と類話との相違を細かく分析することにより、いかに虚構が生まれたのかについて具体的なプロセスを解明している。また各作品の制作意図に沿って物語が改変されており、そこに作者の虚構の意識を見いだした点は、従来の研究ではあまり論じられなかった新たな視点を加えたと言える。</p> <p>第二章では、先行作品の要素の組み合わせによる作品として「霊伝」を例に挙げ、類話群が通用しなくなった時代における小説の創作方法について論じる。先行作品の要素を組み合わせるような作品は、従来の研究においてはあまり高く評価されなかったのであるが、申請者はこれを新たな創作方法とし、またストーリー全体の虚構性を示すものとして、伝奇小説の発展段階であると捉え直しており、こうした作品の文学史的な位置付けについて今後再考を迫るものであると言えるであろう。</p> <p>さらに第三章では、詩を応用した細部描写を綿密に検討することによって、「鄭徳璘伝」のような晩唐の作品においては細部描写が完璧にストーリーと融合していると結論付け、伝奇小説における虚構が一つの頂点に達したことを解明している。</p> <p><b>【論文の評価】</b></p> <p>本論文で高く評価すべき点は、丹念な分析と、それに基づいた鋭い考察によって、唐代伝奇小説における虚構の問題について新たな視点を提供し、伝奇小説の発展について従来には無かった知見を加えた点である。申請者は、すべての唐代伝奇小説をしっかりと読み込んで、それぞれの物語の類話や要素について知悉しており、その基礎の上に立っての作品分析や検討には確かな信頼性がある。また難解な作品を解釈する読解力についても高く評価できる。唐代伝奇小説の発展を虚構の生成という視点から論じる発想は申請者独自のものであり、公開審査においても各審査委員からこの点について高く評価された。</p> <p>一方で、唐代小説の発生の場合や、類話群や要素が伝わる前提となる唐代小説の伝播についての問題にはほとんど触れられていなかったことについて、また類話とすべきか否か判断が分かれる物語について、さらに考察が必要であるとの意見が公開審査において出された。これらの指摘に対し、申請者は真摯に回答し、不備な点を認識しつつ今後さらに六朝小説や唐代の小説以外の詩文にも範囲を広げて調査と研究を深めていきたいと述べ、今後の展望を示すことができた。またそれらの問題点については、本論文全体の価値を損なうものではない。</p> <p>以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。</p>
<p>試験または学力確認の結果の要旨</p>	<p>本論文の公開審査は 2023 年 1 月 19 日（木）16 時 20 分から 18 時 20 分まで、衣笠キャンパス清心館 201 教室で行われた。</p> <p>審査委員会は、公開審査において本論文の主要分野である【中国文学史】および【唐代小説史】について、申請者の【中国文学史に関わる知識】、【六朝及び唐代の小説と文学に関する知識】等について試問し、それぞれについて十分な回答を得ることができた。</p> <p>また、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在籍期間中における学会発表などのさまざまな研究活動の学問的意義についても質疑応答を実施した。それらを通じて申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。</p> <p>したがって、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。</p>

